

8月30日に行なわれた所謂政権選択選挙で、民主党が過半数(241議席)を上回り、308議席を獲得、政権交代を果たすことになりました。

自民党は、結党以来、初めて第2党に転落し、細川政権以来、16年ぶりに非自民政権が誕生しました。

また、衆院選で野党第1党が単独過半数を得ての政権交代は現憲法下では初めてで、日本は、やっと、欧米並みの本格的な2大政党による政治へと大きな転換点を迎えました。

自民党惨敗の要因は何だったのでしょうか。麻生総理は「これが敗因だったとなかなか一言では言えない。自民党に対する積年の不満やら不信が積み重なった」と言い、石破農林水産相も「自民党に対する失望感が今回の政権交代の嵐の本質だ。内輪の論理を排した党でなければ立ち直れない」と分析しています。

また、民主党圧勝の要因は何だったのでしょうか。鳩山代表は「明治以来の官僚主導の政治を政治主導に変え、政治主導で新しい日本の政治をおこす」と言い、幹部ら「政権交代はゴールではなくてスタートだ」と強調してきたことが、国民の共感を得たのでしょうか。

民主党の政策を実現する実力は未知数ではありますが、自民党に対する不満やら不信が、この4年間でマグマとなって蓄積され、とうとう爆発したということでしょうか。

伊丹万作のエッセイ「政治に関する随想」の中に、

「私は生れてからこのかた、まだ一度も国民として選挙権を行使したことがない。

私はそれを自慢するのではない。むしろ一つの怠慢だと思っている。しかし、ここに私が怠慢というのは、私が国民としての義務を怠ったという理由からではなく、たんに芸術家として、与えられた観察の機会をむだにしたという理由からである。すなわち、いまだかつて投票場に近寄ったこともない私は、投票場というものがどんな様子のものかまったく知らない。したがって作家としての私は投票場のシーンを描写する能力がなく演出家としての私は投票場のシーンを演出する能力がない。そして、それは明らかに私の怠慢からきている。このような意味においては私は自己を責める義務があるが、その他の意味においては少しも自己を責める義務を感じたことがないし、今でも感じていない。」

という記述があります。

今まで、投票率が低かったのは、伊丹万作然と、選挙に対して怠慢な国民が多かったのだと思います。景気が良い時は、国民もそれで何とか生活できていました。しかし、不景気の今日、国民はこれでは生活できないと肌で感じるまでになり、一方で、国民の不満・不信に無頓着で、己だけ利を貪る者(政・官・財)が目につくようになり、伊丹万作然としてはいられないと、目覚めた国民によって今回の政権交代が occurred。

今回の政権交代で重要なことは、必ずしも民主党のマニフェストを国民が理解し、賛同し

たためでなく、自民党に対する不満を反映してついに政権交代を選んだことであって、民主党にとって国民の期待したような『変化』を本当に実現できるかにかかっています。

やっと、先進国で唯一、一党支配の政治体制を打破できなかった国民が、前回の郵政民営化と今回の政権交代で、正常な民主主義はこれだということを学びました。

もし、民主党が期待を裏切り、民主党に対する国民の不満が許容範囲を超えると、次回に国民は、再び、政権交代に向けて行動を起すこととなります。

民主党・自民党はそのことを肝に銘じて、前者は素早く政策を実行に移し、後者は素早く党改革を断行し、両者が競いながら、日本の政治を、更に、より高度な民主政治へと進化させて欲しいものです。

日経：「霞が関緊張 民主 脱・官僚依存へ」(8/31)

民主党が 308 議席を獲得し、政権への道を開いた衆院選。投開票から一夜明けた 31 日、東京・霞が関の省庁や街角には劇的な結果への波紋が広がった。「言うべきことは言う」「予算が増えるかも」。「脱・官僚依存」を掲げる新政権に、官僚たちの反応は硬軟様々。一票を投じた市民らも「こんなに勝つとは」と驚きつつ、暮らしの行方を左右する民主党の「次の一步」に関心を寄せた。

「国立メディア芸術総合センター（仮称）」の整備計画などを進めていた文部科学省。建設凍結方針を打ち出した民主党の圧勝で先行きは一気に不透明になった。30 代職員は「計画が白紙になるのは免れないだろう」と不安と緊張をあらわにする。



各党の獲得議席									
	今回	小選挙区	比例区	選挙前		今回	小選挙区	比例区	選挙前
自民	119	64	55	300	民主	308	221	87	115
公明	21	0	21	31	社民	7	3	4	7
改革	0	0	0	1	国民	3	3	0	4
無所属	0	0	-	0	大地	1	-	1	1
共産	9	0	9	9	日本	1	1	0	0
みんな	5	2	3	4	無所属	2	2	-	0
諸派	0	0	0	0					
無所属	4	4	-	6	計 (定数)	480 (480)	300 (300)	180 (180)	478

朝日：「投票率は69%前後に 前回67.51%を上回る」(8/30)

民主党が圧勝した今回の総選挙で小選挙区の投票率は、各都道府県選管が発表した結果などを朝日新聞社で集計したところ、69%前後になる見通し。前回は67.51%で、

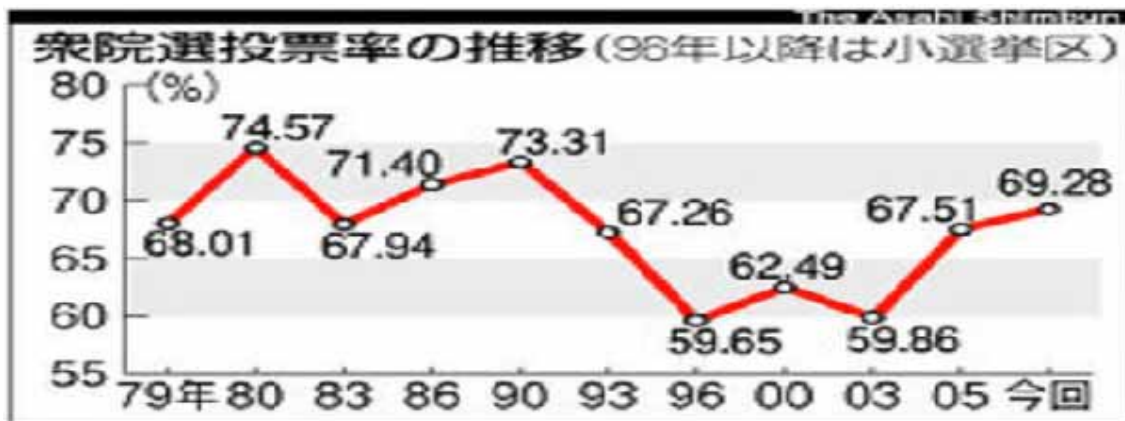
90年(73.31%)以来19年ぶりの70%には届かない見通しだが、小選挙区比例代表並立制で実施された96年以降の5回では過去最高となった。

総選挙の投票率は、現行制度になってから3回は60%前後で推移していたが、小泉ブームが起きた前回05年郵政選挙で上がった。

4年ぶりの総選挙となった今回は、自民、民主両党による「政権選択選挙」になったことで、有権者の関心が高まり、前回はさらに上回る結果となった。

国政選挙では04年参院選から導入された期日前投票も過去最多の約1400万人が参加。投票率上昇を後押しした。

各都道府県選管の発表によると、石川県で前回は4.4ポイント上回る75.67%となったほか、青森、茨城、愛知、香川、高知の各県で3ポイント以上上昇。一方、大分県では前回は0.42ポイント下回った。



<伊丹万作(1900-1946)>

昭和初期の映画監督。本名池内義豊。愛媛県松山市湊町生まれ。松山中学(現・愛媛県立松山東高等学校)卒業。日本映画の基礎を作った監督の一人。

在学中、中村草田男、伊藤大輔などと同人雑誌を作り、上京後、少年雑誌の挿絵や映画の脚本をなど書くようになる。

1927年、谷崎十郎プロに俳優として入社。1928年、片岡千恵蔵プロダクションに助監督兼脚本家として参加。同年『仇討流転』で監督デビュー。

作品に『国土無双』『赤西蠣太』『仇討流転』『春風の彼方へ』『権三と助十』など。



春秋：「歴史的野党圧勝」(8/31)

そのときも大いに風が吹いたのだろう。明治23年、近代史に残る第1回衆院選の話である。自由民権運動の流れをくむ「民党」が171議席を得たのに、政府系の候補者は84議席。日本の国政選挙の歴史は野党圧勝から始まったわけだ。

ほぼ120年を経て、こんどは民党ならぬ民主党の劇的な躍進を平成の有権者はもたらした。予測はあったけれど、現実の数字をみると風、というより嵐のすさまじさに息をのむ。これを生み出したのは政権交代を求める選挙民の沸々たる熱に違いない。時代を動かすダイナミズムが徐々に目覚めたのはたしかだ。

もっとも、それは自公政権への幻滅の裏返しでもあろう。「歴史は多くの場合において悔恨の書であった」と民俗学者の柳田国男は述べている。4年前、圧倒的な力を与えて送り出した政権の不行跡を人々はいやというほど見た。その深い悔恨こそが、今回の大転換を支えていることを民主党も忘れてはなるまい。

明治の最初の衆院選に投票できたのは国民のほんの一握りだった。それとは比べものにならない膨大な数の民意が描きあげた、鮮やかな政権交代である。ああ、こんなはずではなかった。後々、そんな思いを決して抱かせないでほしい。政治がいつの世も私たちに残してきた「悔恨の書」を積み重ねないでほしい。

< 柳田国男 (1875-1962) >

民俗学者。現・兵庫県福崎町生まれ。東京帝国大学法科大学卒業(法学士)。名誉町民第1号。正三位勲一等。

大学では農政学を学び、農商務省のエリート官僚となった後、講演旅行などで地方の実情に触れるうちに次第に民俗的なものへの関心を深めてゆき、当時欧米で流行していたスピリチュアリズムの影響を受ける。

日本でも起っていた「怪談ブーム」のさなかで当時新進作家だった佐々木喜善の招きで、岩手県遠野を訪れ『遠野物語』を執筆。

他に宮崎県椎葉などへの旅の後、郷土会をはじめ、雑誌「郷土研究」を創刊。民俗学の確立した。

その他著書に『蝸牛考』『桃太郎の誕生』『海上の道』『イタカ及びサンカ』など。



天声人語：「日本の大掃除」(8/31)

国会は歴史的な掃除のただ中にある。いや議事堂のことだ。建設から73年、高圧水流による初の汚れ落としで、黒ずんだ御影石に桜色が戻ってきた。議席の布地も張り替わるが、まずはお尻の方がごっそり入れ替わった。

負けに不思議の負けなし。自民党は傍目（はため）にも耐用年数が尽き、最後は民意のあずかり知らぬ面々が1年交代で首相の座をとことん軽くした。政治の非力に一部の官僚がつけこみ、血税や年金が消えていく。やりきれない閉塞（へいそく）を、投票箱に注がれた高圧水が襲った。

だが、うっぷんを晴らして喜んでいる時ではない。積年のよどみは黒々とまだそこにあり、日本を桜色に蘇生する持ち時間は限られる。しがらみのなさや、新たな発想が暮らしや外交に生きなければ代えた意味がない。

55年前にも「戦後最大」と評された政変があった。首相鳩山一郎の大衆人気は、前任吉田茂の近づきがたさの反動でもある。小欄の先輩、荒垣秀雄は「気分の上では世の中がいくらか明るくなった」と歓迎した。孫の圧勝も前政権の「お陰」と割り引くのがいい。

「希望だけ膨らまずと期待外れの時の揺り戻しが強い」。万感こもる宮崎県知事の戒めだ。有権者は、小選挙区という洗浄機の使い勝手、破壊力を知った。約束した「日本の大掃除」の手を緩めたら、自民の二の舞いだらう。

時の権力に目を光らせるのがジャーナリズムの本懐。なれば小欄も今朝をもって照準を改め、筆鋒（ひっぽう）を研ぎ直すとする。明るくなったか否かを後世に問われるのは、政変後の気分ではなく現実である。

< 鳩山一郎 (1883-1959) >

第52・53・54代内閣総理大臣。初代自民党総裁。東京市牛込区東五軒町生まれ。東京帝国大学英法科卒業。

戦前は立憲政友会の議員として活躍、犬養内閣から齋藤内閣にかけて文部大臣を務め、戦中には東條内閣による戦時刑事特別法改正案に反対。

戦後、日本の独立確保という視点から再軍備、改憲を唱え、三木武吉の尽力により日本民主党・自由党の保守を合同、自民党を結成。吉田茂政権の後に首相を務め(1954-1956年)、ソビエト社会主義共和国連邦との二国間の国交回復を成し遂げた。

著書に『鳩山一郎・黨日記(伊藤隆、季武嘉也編)』『鳩山一郎回顧録(口述筆記)』『私の自叙伝』『私の信条』など。



編集手帳：「政権交代の立役者」(8/31)

赤い糸 夫居ぬ間にそっと切る という川柳がある。“万年政権党”と結ばれていた「赤い糸」の絆(きずな)を有権者がそっと切ったのはいつだろう。衆院選の開票結果は長く連れ添った夫婦の熟年離婚を思わせる。

麻生政権の発足当時、自民党の支持率は民主党より高かった。見限られたのはそれ以降、政権交代の立役者はやはり麻生さんになる。歴史のページは偉人がめくるとは限らない。

不手際つづきで不人気は隠れもないその人を、天下分け目の一戦にかつがざるを得なかった自民党 人材の枯渇ぶりに、「もはやこれまで」とサジを投げた有権者は多かろう。

相手の自壊作用にも助けられて歴史的な勝利を手にした民主党だが、政策の財源や外交の進路をめぐる人々の不安は、いまに至るも解消できていない。「きっと何かが変わるはず」という漠然たる希望に、不安がひとまず席を譲っただけである。

亀井勝一郎の「青春論」にいわく、人はしばしば、結婚してから失恋するものである。新しい伴侶の座を射止めた鳩山民主党ものぼせてはいられない。希望が失望に変わるとき、「赤い糸」ははかないものである。

< 亀井勝一郎 (1907-1966) >

文芸評論家。北海道函館市元町生まれ。旧制函館中学校(現・北海道函館中部高等学校)から旧制山形高等学校(現山形大学)を経て、東京帝国大学文学部美学科に入学するが、マルクス・レーニンに傾倒し、退学。

プロレタリア作家として、1934年、同人雑誌『現実』、1935年『日本浪曼派』を創刊、1937年には『人間教育(ゲエテへの一つの試み)』を刊行。

1938年(昭和13年)、『人間教育』が評価され菊池寛より池谷賞を受ける。

その後、仏教との出会いにより開眼し、親鸞の教義を信仰し、宗教論、美術論、人生論、文明論、文学論など人間原理に根ざした著作を連載。

著書に『転形期の文学』『人間教育 ゲエテへの一つの試み』『島崎藤村』『作家論』『東洋の愛』『親鸞』など。



余録：「政権交代という選択」(8/31)

20世紀を代表する自由主義思想家ハイエクにいわせると、民主主義は統治の目標について何も示していない。だが「それは人間がこれまで発見した統治方法の中で、統治者を平和的に代える唯一の方法だからこそ、闘って実現しようとする価値がある」。

いや、むしろ有権者は各党の掲げる政策目標を慎重に検討したことだろう。だがそれにもまして今は政権交代という民主主義の証しを示す時だとの思いが堰(せき)を切ったように見える。そう感じさせる民主党の歴史的圧勝と自民党の大敗である。

2大政党を軸とした総選挙による政権交代はここ半世紀以上なかった出来事だ。1955年以来続いた自民党の1党優位制から、2大政党を軸とした政権交代のある政治へ - - 有権者が選んだのは、民主主義の政党システムの交代でもある。

源氏と平家、東軍と西軍、勤皇と佐幕.....歴史の転換は二つの軸への力の結集と、その対決を通して実現することが多い。いわばその歴史のダイナミズムを議会政治に取り込もうという2大政党間の政権交代だ。民主党の得票は長期政権のよどみ一掃への期待によってふくらんだ。

ただ2大政党を軸とした政権交代が常に政治の質を高めるとは限らない。こと日本では戦前の政友会と民政党の政争が軍の政治介入を招き、国民を破局に導いた歴史がある。民主主義はその統治の目標と内実を保証してくれるわけではない。

これから政権交代と共にかつてない政治的光景を目の当たりにする数カ月となる。国民はその変化の意味するところをじっくり読み取ることになる。むしろ政権を代えようと思えば代えられることはもう十分に分かっている。

<フリードリヒ・A・ハイエク(1899-1992)>

経済学者、哲学者。ウィーン大学で法学を学び、法学と社会科学の博士号を取得。ノーベル経済学賞受賞。

オーストリア学派の代表的学者の一人であり、経済学、政治哲学、法哲学、さらに心理学にまで渡る多岐な業績を残した。

その思想は、後の英国のマーガレット・サッチャーや米国のロナルド・レーガンによる新保守主義・新自由主義の精神的支柱となり、1991年、ブッシュ大統領により、アメリカの民間人へ与えられる最高の栄誉賞である大統領自由勲章を受章。

著書に『貨幣と景気変動』(『資本の純粹理論』『価格と生産』『景気と貨幣 貨幣理論と景気理論』『科学による反革命 理性の濫用』など。

